

平成 28 年度 大学院工芸科学研究科博士後期課程 学位記授与式
学長告辞

本日、博士の学位を取得されました皆さん、誠におめでとうございます。京都工芸繊維大学を代表し、心からお祝い申し上げます。また、皆さんをこれまで、支え、育ててこられたご家族の皆様をはじめ、本日駆けつけていただいた関係者の方々に対し、心からお祝いを申し上げたいと思います。

京都工芸繊維大学は、昭和 63 年に大学院を改組し、工芸科学研究科を設置し、これまでに、975 名の博士号の学位を授与してまいりました。

本日皆さんには、課程博士第 777 号から 806 号まで、論文博士第 200 号から 203 号までの学位を授与致しました。皆さんの研究業績は本学の知的財産に加えられ、提出して頂いた学位論文は広く人々に公開され、それぞれの分野における新たな展開のため、また技術革新や産業創出のために活用されます。さらには、皆さんに続く後輩の研究のために利用されます。

学位を取得された皆さんには、今後、それぞれの分野において能力を発揮されることを希望しています。さらに、特定の専門領域で研究テーマを深く極めることに主眼を置いた研究だけでなく、広い視野に立って、他の研究者との共同作業を心がけていただきたいと思います。そして自らの研究や仕事が、どのような学術的な意味をもつのかだけでなく、社会的にどのような役割を持つのか、社会にどのような影響を及ぼすのか、科学者として、技術者として、一人の人間として、考えていただきたいと思います。

これまで大学の研究活動は専門領域の学会を中心に展開されており、研究成果の社会への適用は企業が行うものとされてきました。大学は基礎研究を行い、企業はそれを応用するという考え方です。しかし今日、日本社会が我々に求めているのは、大学はイノベーションの拠点となり、科学技術を産業に実装することによって社会変革をもたらすべし、というものです。さらに社会変革を実現するためには、まず初めに日本社会のあるべき像を提示し、それを実現するためには、どのような科学技術が必要かを考え、すでにあるものは活用し、ないものは創り出せ、という考え方です。こうした時代背景を踏まえて、これからの研究者としての生きる道を考えなければなりません。

一人の研究者としての行動規範は、「自分が他者からされたくないことを、他者にしてはいけない」、逆に「自分にしてもらいたいことを、他人にしてあげなさい」ということになるでしょう。個人の行動規範としてはこれで十分かもしれません。しかし近年、社会的責任の範囲はより広く広がっています。個人的な努力だけでは解決できない課題、これまで気がつかず社会の底に埋もれていた課題、後回しにしてきた潜在的な課題、広く複雑に絡み合った社会的課題の解決が大切です。

実際に法律や規則にのっとっていても、個人個人が善意の努力を積み重ねても、社会全体としては誤った方向に向かっている事柄があります。日常生活の中では当然のことのように思っている事柄も、災害や事故が起こり、その原因を調べていくと、規則を超える深い考察が必要であったことに気づきます。

近年の研究不正や事故処理に関する事例を顧みるに、日本社会が参照すべき基本的な視点は、インドの賢人、マハトマ・ガンジーが提唱した「七つの社会的罪」ではないでしょうか。1925年に young India に掲載された七つの社会的罪とは、

- 1 理念なき政治
- 2 労働なき富
- 3 良心なき快樂
- 4 人格なき学識
- 5 道徳なき商業
- 6 人間性なき科学
- 7 献身なき信仰

の七つです。特に、最高の学識をもって、社会で活躍しようとする皆さんに申し上げたいのは、「人格なき学識」は社会的罪である、同じく「人間性なき科学」は社会的罪であるというメッセージです。これらのメッセージを深く心に刻み、これからの研究生活を送っていただきたいと思えます。

皆さんが活躍される人間社会は、複数の価値観が併存する多様性が特徴であり、単一の真理を求める科学的思考法からみれば、時には曖昧であり、時には揺れ動き、明快な結果が得られないこともあります。しかし人間社会の多様性と豊かさを単一の解答に押し込めるような短絡した思考は慎むべきであります。実証性や客観性を軽んじ、自分の都合の良いように世界を解釈し、社会の現実を矮小化し、歪めるような反知性主義的主張には十分に留意していただきたいと思えます。

科学技術の進展の速度は、20世紀を通じて勢いを増し、人間のコントロールを超えるまでに至りました。人間性なき科学とは、科学技術の進展が人間の幸福を置いてきぼりにして自動運動に陥っている状態を意味します。それを主導し、支えている科学者、技術者の知識や技能は、技術のための技術となり、知識のための知識となり、人間の身体や感情を伴わない人格なき学識に過ぎなくなっている。こうした盲目的で科学技術に隷属するような研究活動は、グロテスクであるばかりでなく、危険であることに気がつかなければなりません。今一度、本学における研究活動は、「ヒューマン・オリエンティッド・テクノロジー」の理念のもとに実施していることを思い起こして頂きたいと思えます。

私たちは、これからも皆さんの活躍を応援し続けます。また皆さんが卒業後も大学を愛することを心から願っております。母校への愛情は、自らの人生とこれからの活動に自信と誇りを与え、より高い課題に取り組む勇気を与えてくれます。皆さんは、私たち教育者の誇りであり、皆さんの活躍は、京都工芸繊維大学が世界一の大学であるということを世界に示す証しとなります。近い将来、海外の大学で、また世界の街で皆さんと出会い、再び共同研究が行える日が来ることを楽しみにしています。

平成 28 年 3 月 25 日
京都工芸繊維大学長
古山正雄